

◇原爆文学研究会二〇年——これまでとこれから——

十年目の節目に

柳瀬 善治

原爆文学研究に参加して十年目となるわけですが、その年に大震災と原発事故が起こってしまうという途方もない事態となりました。

正直申しまして、日本という国は有史以来最大の危機を迎えたのではないかと、そうした予兆は何年も前から見え始めていたのに、その対処を怠っていたのではないかと気がいたします。十年前に、私はある学会誌に寄せた原稿で、「日本近代文学は二一世紀を生き延びることができるのか」と書きました。ですが、この危惧はこのままですと最も不幸な形で実現（生き延びられないのは文学だけではない）してしまうかもしれせん。

非常に皮肉な意味で、これからの日本文学は「国家のくびきから解放放たれる」のでしょうか、国家がセキュリティの装置であることを放棄した時、そこで暮らす人々の生活はどうなってしまうのかという問いは残るわけで（自律した亡命できる人間など限られています）、そうした人々の声に向かい合うことも必要とされるでしょう。

（「国が敗れても、歌（文学）が残ればいい」というのでは保田與重郎と同じです。）

昨年この会のシンポジウムに参加しました折、原爆の記憶の

継承の問題について申し上げました。しかし、今起こっているのは原爆文学で書かれた事態が、一挙に現実と未来になってしまった」という状況であり、それを見て襲われるのは、決して起こってはならない筈の事態が起きてしまったという何とも言えない感覚です。

三月十一日に、私は海外の勤務先で文学史の授業をしていたのですが、その時説明していたのは、井伏鱒二の『黒い雨』と『青ヶ島大槓記』、そして『遙拝隊長』でした。この三つの作品はそのまま現在の日本そのものでしょう。改めて、原爆文学の作品を読み返していますが、あまりにそれがアクチュアル過ぎて身を切られるような感覚に襲われます。

しかし、原爆文学の書き手たちは、そうした「地獄絵図」をかいくぐってきたのであり、目をそらすことなく、その作品をこれからの世代に伝えていかなければいけないと感じます。それはこれから予測される先の見えない時代への指針ともなるはずで。

そして、「これからの世代の未来」を奪ってはならない、それを何よりも痛切に感じます。